

# 初月の情愛

零ミア.exe

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある鎮守府の初月のSS。

タイトルは適当。

pixivに同時掲載。

最後のセリフを言わせたかっただけだとか言えない

目次

初月の情愛	1
初月への恩返し	8

## 初月の情愛

今回の出撃も無事に全員帰投という形に終わり、僕はひとつ安堵の息を漏らした。鎮守府に戻ってきた安心感というものは他の人達も持つようで、出撃していた各々が僕と同じような事をしていた。

僕はあらかじめ用意されていた報告書に、今回あったことを手早く簡易的に纏めていく。

敵艦隊の編成はどうだったか。こちらの陣形はその艦隊に対して効果的だったか。今回こちらが受けた被害はどのくらいのもものだったか。その出撃で資源をどのくらい消費したか。等等など。

それを数分で形にした僕は、そばにいた秋月姉さんに声を掛けた。

「秋月姉さん。僕はこれを出してくるよ」

「分かりました。では、先に部屋へ戻ってますね」

「分かった」

その会話を機に、僕はその場から離れた。



提督に報告書を出し、部屋に戻ろうと渡り廊下を歩いていると、窓の外にあるものを見つけた。窓越しにそれを注意深く観察する。

植木の影で力なく倒れているそれは、どうやら四足歩行の生き物のようだ。僕はその正体をきちんと確認する為、今いる場所から一番近い勝手口へと向かう。

勝手口であるドアのノブを捻り、押し開ける。普段このドアを開ける人がいないからか、それを開ける際に金属が擦れた際の耳が痛くなる音を発した。

結構大きい音で、野生の生き物なら驚いて逃げ出すだろう。

しかし、ドアの向こうにいるであろう生き物は反応を示さなかった。

僕はその生き物に近づき、状態を確認する。

「これは……」

その状態は酷いものだった。

そこにあつたのは全身が砂に塗れ、さらには息が弱々しくなっている、生後間もないであろう子猫の姿だった。

「ご丁寧に蠅まで集り始め、いかにも「飢えて死にます」を体現しているようだった。」

「取り敢えず、こいつの身の保全が最優先だな」

僕はその子を優しく抱え込む。自分の制服が汚れようと構わない。戦闘で破ける事があるため、同じ服は何着もある。

抱え込んだその体はまだ脈を打っており、息もしていた。まだ間に合うだろう。

「まだ死ぬな！ 今手当してやるからな！」

僕は腕の中の子猫にそう声を掛けると、開けたままの勝手口から廊下へと戻り、来た道を引き返した。



「——これで安静にしておけば、もう安心ですよ」

「本当か!? 良かった……」

検診を終えた白衣の男性が聴診器を耳から取り、肩にかけた。猫は毛布を敷いた執務机の上で横になっている。

その白衣の男の言葉に、僕は安堵した。

提督は安堵した僕を見ると、帽子を弄りながら声を掛けた。

「しかしまあ、びっくりしたぞ初月。いきなり執務室に飛び込んでくるなり獣医を呼べて。俺の知り合いに獣医がいなかったら大変なことになってたぞ、主に俺が」

「そ、それは……すまないと思っっている」

「まあまあ、結果オーライでしょう？ こうして子猫も助かったんですし」

「……まあ、そうだな」

しかし、本当に良かった。

こうして僕の手があつたから一つの命が救われたのだと思うと、こ

の手に誇りを感じる。

「そういえば初月、この子どうするんだ？」

「どうする……とは？」

「この子の今後をどうするか……つまり、お前が飼うのか、新しく親を探して引き取ってもらうのか、ってことだ」

「そうか。ここで命を引きとめたからといって、はいそこで終わり、というわけにはいかない。」

「この子が生きていく為には、誰かが引きとらなければならぬ。」

「親か……」

ふと、その子猫を見る。

見つけた時には砂で薄汚れていて毛の色など分からなかったが、この子は白猫なのか。目は覚めており、僕が見ている事に気付くと一つ鳴いた。

……なんだ、この可愛い生き物は。防空駆逐艦だからか、こういうか弱そうな生き物を見ると、つい守りたくなってくる。

決めた。この子は僕が守る。もとい飼う。

「なら、僕が飼おう」

「マジかよ」

提督は意外なものでも見たように、こちらに目をやる。

「なんだ？ お前が飼うかって選択肢を挙げたのは提督じゃないか」

「いやまあ、確かに挙げたのは俺だし、艦娘寮もペット不可ってわけじゃないけどさあ……」

提督は何か渋っているようだ。ペット不可でないなら、別に渋る必要などないはず。

となれば、それ以外で何か問題があるのだろう。

「何か問題があるのか？」

「いやほら、日頃節約生活をしている秋月が、出費が激しくなるものを許可するか？」

「……………」

「そうか。秋月姉さんのことを忘れていた。」

照月姉さんに関しては秋月姉さんに合わせているだけなので大丈夫

夫だろう。

「なんとか、説得する」

「そこまでするのか……」

提督は何やら顎に手を当てて唸り始めた。

急に唸り始めたが、僕の為に何か策を練っているのだろうか。

「初月がそこまで言うなら、俺が通しておこう」

「提督が？」

「ああ。流石に提督の命令に背く艦娘はあまりいないだろう」

「そこまでするのか。」

確かに、提督の命令に背く艦娘は珍しいが。

「決まりましたか？」

「ああ。うちで飼うことにするよ」

「そうですか。では、また後日検診に来ます。それまでは安静にしてあげてくださいね」

「わかった。話を通しておくから、門の前まで来たら俺のスマホに連絡してくれ」

「はい。それでは、また」

白衣の男性はそう言って、執務室から出ていった。男性の肩に妖精が乗っていたが、あの人も妖精が見えるのだろうか。だとしたらあの妖精は案内役ということになるが……まあいいだろう。

提督は机の中から紙を取り出すと、万年筆を取り出した。

「なあ、提督」

「なんだ？」

「その、本当に良いのか？」

「別に構わない。ただ、その辺のルールもきちんと思えないといけな  
いからな」

「そ、そうか」

少しして提督は万年筆を仕舞った。先程から書いていた紙を三つ折りにして封筒に仕舞う。

流れるようにその動作をこなすと、その封筒を此方に差し出してきた。

「これを秋月に渡ししてくれ。それと、道具が揃うまでこの子猫はここで監視しておくから、それだけは納得してくれ」

「分かった。ありがとう、提督」

「なに、日頃ここを守っているからな。これくらいどうってことない」「それでもだ。ありがとう」

「……どういたしまして」

提督は帽子で目元を隠した。正面からお礼を言われることに慣れていないのだろう。

僕は封筒を受け取ると、すぐに部屋を出た。一刻も早く姉さん達に報告しなければ。

「……珍しいもんだな。初月が自ら何かを欲するなんて」

提督の呟きに、白猫は鳴いて返した。



あの子猫を僕が保護してから約三カ月が経った。

初めは渋っていた秋月姉さんも、子猫を見るとすぐに受け入れてくれた。やはり、子猫の可愛さには勝てなかったらしい。

「白月はくつき、こつちおいで〜」

子猫を迎え入れてからまず考えたのは名前だった。

由来は白の毛並みと僕達の名前にある月だ。安直といえばそうだが、名前というものはシンプルなのがベストだと思う。

「白月はくつき、おやつもありますよ〜」

「……………」

白月を釣ろうとしている姉さん達をよそに、僕は膝の上に居座っている白月の頭を軽く撫でる。すると白月は嬉しそうに目を細める。気持ちが良いのだろう。

ふと顔を挙げて姉さん達の方を見る。そこには猫のおやつらしきものを持った秋月姉さんと、照月姉さん。何故か悔しそうな表情を浮かべている。



「うう……初月ばかりずるい！」

「そうですね！ 秋月達にも触れさせてください！」

「そんなこと言われたってな……」

この三ヶ月間変わらない事と言えば。

白月が僕の傍から一時も離れないことだろう。流石に出撃や遠征の時は離れているが、それ以外は殆ど僕の傍にいる。

白衣の男性曰く、僕を親だと思い込んでるらしい。確かに危険な状態の白月を助けたのは僕だ。だけど、そんな僕を親だと思い込むだろうか。

「なら、こっちに来て撫であればいいじゃないか」

「秋月達だって、たまには白月を独占したいんです」

「そうそう」

「でも、どうするかは白月の自由だぞ？ なあ、白月？」

そう言っ僕は白月の顎のあたりを撫でる。白月は再び目を細め、遂には僕に擦り寄ってきた。

その姿に感化されたのか、僕は自然と笑みを零していたらしい。姉さん達から妬みの視線が飛んできた。

「全く……仕方ないですね。あ、もうこんな時間ですか。私はお昼を作ってきますね」

「あ、じゃあ照月も手伝うよー！」

「僕は白月を見てるよ。ここから退きそうもないし」

姉さん達は白月を一旦諦めたのか、昼食を作りに行った。それを軽く見送ってから、白月に視線を戻す。

白月は比較的大人しい。だからこうして僕の膝の上にいるのだが。ふと、白月が僕の指に噛みつく。が、噛みつくといっても痛みを感じないので、所謂甘噛みというやつだろう。白月からしてみれば、僕の手とじやれているだけだ。

「……ふふっ、お前は可愛いな」

小さかった頃と変わらず、白月は僕の膝の上でゴロゴロしている。そんな白月を見て、僕は安心感を覚えるようになった。

僕の手で助けた命が、ここで生を全うしている。そう思うだけで、

僕は頑張れる。

だからこれからも、きちんとこの手で守らなければならない。守る理由があるから、僕はさらに頑張れる。

「お前は、僕が最後まで守ってやるからな」

——だから、これからも僕に頑張れる理由を与えてくれ、白月。

そう心で言い、僕は白月の頭を優しく撫でた。

## 初月への恩返し

夏の暑さも既に和らぎ、冬の寒さの片鱗が見えだした秋の下旬。大本营主導による中規模作戦が終わり、艦隊の士気が落ち着いてきた頃のこと。

秋月型防空駆逐艦の四番艦である僕——初月は、中規模作戦で負った傷を入渠を終えて自分の部屋へと戻っていた。

「白月、ご飯だ」

「みゃーん」

捨てられていた白月を拾ってから約一年の月日が経ち、彼女は大人の猫へと育った。拾った頃とは違って抱える時に使う筋力も増えたが、僕にはそれが彼女が日々成長しているのだと認識出来て嬉しかった。

「お、今日も元気だね、白月」

「照月姉さん」

白月の目の前にご飯の入った皿を置くと、後ろから照月姉さんが背中を押してきた。

「白月も来てから一年だね」

「そうだな」

「そろそろ鶴の恩返しみたいに、人になつたりして！」

「それは……ないだろ」

「もう、夢がないなあ」

そんな他愛もない会話をしつつ、白月の様子を眺める。彼女は僕の視線に気付いて、首を起こしてひとつ鳴いた。首を起こす時に、首輪に付けられた鈴がチリンと響く。

鳴いた白月が再び皿に意識を向けると、突如として部屋のスピーカーから音が流れた。

『業務連絡、業務連絡。名前を呼ばれた者は至急執務室に来るように。赤城、加賀、ビスマルク、プリンツ、初月、海風。繰り返す——』

「……呼ばれちゃったね」

「そうだな」

それは、何らかの理由で僕を呼び出す放送だった。

「私が見てるから、行ってきていいよ?」

「照月姉さん、ありがとう」

「いいっていいって」

照月姉さんが見ていてくれるというので、僕は白月の事を任せてから部屋を出た。

「……いひひ」



「——報告は以上だ。お前達には暫く休息期間を与える。各自身体を休めてくれ」

『了解!』

僕が執務室に呼ばれたのは、先日の中規模作戦で特に活躍した者に褒美を与えるというものだった。

赤城さんと加賀さんは航空戦で相手の艦載機を次々と墜したから。

ビスマルクさんは第二艦隊の旗艦として僕達の士気を高めていたから。

プリンツさんは着任したばかりだが、提督の無茶振りにも関わらず第一艦隊の旗艦を務めきったから。

海風は第一海域において、療養中の五十鈴さんに代わり、敵潜水艦の殲滅に大きく貢献したから。

僕は、敵艦載機の撃墜数が全艦娘の中で最も多かったから。

「じゃあ、解散」

提督の言葉と共に、集まったメンツは執務室を後にし、それぞれ散らばっていった。僕もその流れに乗って部屋への道を辿った。

「……これでいいか、秋月?」

「はい、ありがとうございます!」

「しかしまあ、お前らも酷い事考えるなあ」

「初月が普段から白月にベタベタしてるので、仕返しです」

「ハイハイ……ほどほどにな?」

「分かっています」



「照月姉さん、白月、今戻った……んん？」

部屋に着いた僕は、その部屋の異変に気が付いた。先程部屋を出るまではいたはずの白月と照月姉さんがいなくなっていたのだ。

照月姉さんがどこかへ連れて行ってしまったのだろうか。

それならそのうち戻ってくるだろうと信じて、ブーツを脱ごうと座り込んだ時だった。

——不意に部屋の扉が開いた。

僕はその扉を開いた人物に驚き、ブーツを脱ごうとしていた手が止まってしまった。

「……お初さん？」

「……え、あ……あ？」

その人物は、白い全身タイツと秋月型の制服を見に纏い、肩にグレーのコート。銀にも近い白髪を肩まで伸ばし、ハチマキに付いた金具を使って短めのワンサイドアップにしている。

その人物のイメージカラーを訪ねたならば、堂々と『白』と帰ってくるだろう。

「すずつ——」

「私は『白月』。お初さんに拾って頂いた恩を返したく、この姿で参りました」

「……えっ？」

——今、何を言った？

理解の追いつかない僕をよそに、彼女は右手首を見せてきた。

「お初さんに頂いたこの首輪、大事に着けさせて頂いています」

「そ、そうか。気に入ってくれて良かった」

彼女の右手首にあるのは、紛れもなく白月の付けている首輪。つまりは、彼女は紛れもなく白月ということになる。

『そろそろ鶴の恩返しみたいに、人になつたりして！』

——まさか、照月姉さんは全て知っていたのか!?  
白月が、人の姿になれることを。

「ところでお初さん」

「なんだ？」

「後ろを見ていただきたいのですが……」

「……後ろ？」

僕は彼女に言われた通り、後ろへと振り向く。

——そこには、『ドッキリ大成功』の看板を持った照月姉さんと、首輪の無い白月が存在していた。



「涼月姉さん」

「ごめんなさい、つい出来心で……」

「照月姉さん」

「にゃーん？」

「照月姉さん？」

「ごめんごめん、初月ばかり白月に懐かれてて悔しくて……」

「はぁ……」

「……お初さん？」

「……まあ、その、なんだ」

——おかえり、涼月姉さん。